



Title	ペルシア語の品詞分類における語の柔軟性と曖昧性について
Author(s)	Jahedzadeh, Behnam
Citation	外国語教育のフロンティア. 2019, 2, p. 53-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71881
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ペルシア語の品詞分類における語の柔軟性と曖昧性について

Ambiguity and Flexibility of Persian Word Class

JAHEDZADEH, Behnam

要約

ペルシア語における自立語の品詞には、名詞、形容詞、副詞、動詞、代名詞、前置詞、後置詞、指示詞、接続詞等がある。品詞を変える語形成には、接辞による場合、前置詞による場合、そして語形が変化しない場合がある。形態的な特徴を持つ語が少なく、形態論の観点からペルシア語の品詞分類を行うことは難しい。また、形態的な特徴を持たない語は、文外でどの品詞に属するか識別が困難である。これらの語は文中で使われて初めて品詞が決まることになる。ペルシア語では語形変化しない語は形態的な特徴に欠けており、文中における意味的な側面からの区別が重要となる。形式的に名詞でありながら形容詞や副詞の性質を備えていて、複数の品詞としての機能を兼備している語がある。また、名詞に接尾辞が付加して派生する語に形容詞と副詞の機能が同時に備わっていることもあり、形式的制約や意味的な不規則性が多く存在する。さらに、動詞のなかでも名詞的な特徴を有する動詞の不定形、脱範疇化して機能語化している軽動詞の *kardan* (to do)、*šodan* (to become)、*nemudan* (to do)、*gaštan* (to turn, to become)、*gardidan* (to become) が意味的にある程度イディオム化しているため、統語的には一般動詞と同様には扱えない。感情動詞の品詞分類の上でのミスマッチも多く存在する。本稿では、ペルシア語の品詞分類にまつわる上記の問題を取り上げ、ペルシア語における品詞分類のミスマッチを明らかにしたい¹⁾。

キーワード：ペルシア語、品詞分類、動詞、名詞、形容詞

1. 品詞の分類と語の柔軟性

木村 (1996:20) は品詞を次のように定義している。「品詞とは文法上の共通の特徴をもった単語のグループのことである。」品詞の分類に使われる基準は語の統語的機能、形態的な特徴と意味である。それは、語の統語的な機能は形態的な特徴や意味の側面と緊密な関係にあるからである。世界の諸言語における品詞は普遍性と個別性があり、すべての言語に動詞的なものと名詞的なものが存在する²⁾。また、個別的にどの言語にも品詞が曖昧な語があり、複数の品詞としての機能を兼備している語もある。松村 (1995) によると、日本語では「たしか」、「はるか」は形容詞にも副詞にも用いられる。湯浅 (2009) は先行研究の間で品詞の分け方が異なっている「わけ」、「挙句」、「関して」等の例を取り上げ、日本語

における品詞分類は簡単にいかない意味と形の間 mismatches を論じている。トルコ語も品詞が柔軟性をもつ言語であり、一つの語が特定の品詞の枠を超えて他の二つ以上の品詞に所属することがある。

Göksel and Kerslake (2005:49) によると「トルコ語における名詞、形容詞と副詞の間の境界は幾分曖昧であって、多くの語が二つ以上の品詞に所属することがある。また、これらの語はどれか一つ所属する優勢な品詞が存在する」と述べている。以下、Göksel and Kerslake (2005) があげた名詞、副詞、形容詞として使われる *Güzel* の用例である。

- (1) *güzelim* (my beauty)
- (2) *güzel konuştu*. (S/he spoke well.)
- (3) *güzel bir köpek* (a beautiful dog)

山橋 (2013) によると、英語では名詞が形を変えずに動詞の性質をもついわゆる「転成動詞 (denominal verb)」現象が非常に多い。例えば、英語では ‘water’ は「水」の意味で「名詞」と見なされるが、‘I will water it’ の「(私が) 水をまく/やる」の意味では「動詞」と見なされる。両者の間に形式上区別すべき何らか明確な違いはない。つまり、同一の形式 ‘water’ が名詞としても動詞としても用いられることであり、他にも ‘book’, ‘carpet’, ‘tea’ 等英語にはこのような語が非常に多い。(山橋2013:41)

2. ペルシア語における品詞分類の概要

ペルシア語における品詞の種類について、文法学者の意見は一致しない。1つの品詞カテゴリーに、どのような語が含まれるのか、とらえ方がそれぞれ異なるからである。例えば、Taleqani(1964)³⁾ はペルシア語の品詞を9つの名詞、形容詞、皮肉詞、数詞、動詞、副詞、補助詞、関係詞と間投詞に分けているのに対して、ルビンチク (佐藤訳 2000) や Shariyat(1993)⁴⁾ は6つの動詞、名詞、代名詞、形容詞、副詞、補助詞を挙げている。一方、Kalbasi(2001)⁵⁾ は名詞、形容詞、動詞、副詞、代名詞、数詞、間投詞や補助詞という8つの品詞に分類している。ペルシア語は語の形態的な特徴に乏しいことから、文法書では一般的にこれらの品詞の意味や統語的な役割が取り上げられ、品詞分類に関する意味論的・統語論的な定義に基づく説明がメインである。

3. ペルシア語における名詞及び形容詞の緊密性

ペルシア語の伝統文法では名詞は人や動物、植物やものを指す語、形容詞は名詞の様態を表す品詞と定義される⁶⁾。形態論的に単純形容詞以外に派生形や複合形がある。形容詞は名詞に後続し、活用はしない。具体的には、*mard-e xub* (nice man) のように、エザーフェ (-e)⁷⁾ で名詞と連結する。形容詞には *xub* (nice, good), *zībā* (beautiful), *boland* (long, high) など

のように単純形容詞、*bārān-ī* (rainy), *šaxs-ī* (personal) などのように単純語に接尾辞がついて形成された派生形容詞と *pāk konande* (detergent, cleaner) などのように名詞や形容詞と過去分詞などの結合によって作られる複合形容詞がある。また、イラン語系の形容詞以外に、外来語由来の形容詞も数多くある。

ペルシア語では形容詞を名詞の代わりとしても用いることができ、名詞と形容詞が密接な関係を有している。特に、単純形の場合、名詞や形容詞には区別できる形態論的な特徴がなく、統語的な役割を得てはじめて品詞が決まることがある。さらに、場合によっては、一つの語に3つの品詞機能が備わっていることもある。このような語の数は多くないが、*javān* がその一例である。Sotoudeh(2006)⁸⁾ や Anvari(2004)⁹⁾ では *javān* の品詞を名詞 (若者)、形容詞 (若い) としている。しかし、下記の例からもわかるように *javān* は動詞を修飾して副詞の役割を果たしていることが伺える。

(4) u *javān* mord.

s/he young died-3SG

(He died when he was young.)

(5) *ān zan xeylī javān be nazar mī-res-ad.*

that woman very young to appear IMPF-reach-3SG

(She looks very young.)

表1はペルシア語における一部の単純語及び複合語の品詞の柔軟性を示している。(Ar.)はアラビア語由来の語である。一つの語がいくつもの品詞に属することを伺える。

表1. ペルシア語における語の品詞の柔軟性

語	形容詞	副詞	名詞	意味
xub	+	+	-	nice, good
<i>zībā</i>	+	+	-	beautiful
saxt	+	+	-	hard
<i>āsān</i>	+	+	-	easy
<i>moškel</i> (Ar.)	+	+	+	hard, tough
<i>ʔjīb</i> (Ar.)	+	+	-	strange
<i>tāze</i>	+	+	-	new
<i>javān</i>	+	+	+	young
<i>tanhā</i>	+	+	-	lonely
<i>sard konande</i>	+	-	+	refrigerator

形容詞と名詞の派生に *-i*, *-mand*, *-ān*, *āne*, *-gar*, *-ā*, *-š*, *-in* など、数多くの接尾辞が用いられるが、生産的なものとそうでないものがある。その中で接尾辞の *-ī*¹⁰ が非常に生産的で、名詞から形容詞を、形容詞から名詞を、また動詞から名詞、形容詞及び副詞を派生することが可能である。以下それぞれの用例である。

- (6.a) *bārān* (rain) (名詞)
- (6.b) *bārān-ī* (rainy) (形容詞)
- (7.a) *mehrabān* (kind) (形容詞)
- (7.b) *mehrabān-ī* (kindness) (名詞)
- (8.a) *xordan* (to eat) (不定形)
- (8.b) *xordan-ī* (food, delicious) (名詞、形容詞)
- (9.a) *raftan* (to go) (不定形)
- (9.b) *raftan-ī* (about to go, on the point of death, time to go) (形容詞、副詞)

さらに、*-ī* がつく不定形は、その動詞の意味によって、派生する語が名詞、形容詞または副詞となることがある。

例えば、例(8)でもみたように、派生の結果形成された語は名詞でも形容詞でもあるが、*nušīdan* (to drink) から派生する *nušīdan-i* (drink) の品詞は名詞のみとなる。このように形式と意味の間のずれは他の動詞の場合も生じる。*-ī* が二つの動詞の不定形 *āmadan* と *bargaštan* について派生する語は副詞のみとなる。

- (10) *āmadan-ī* *Alī rā dīd-am*.
to come-suffix, Ali ACC saw-1SG
(I saw Ali on my way here.)
- (11) *bargaštan-ī* *mīve xarīd-am*.
Coming back fruit buy-PAST-1SG
(I bought fruit on my way back.)

このように、ペルシア語における名詞と形容詞の間に緊密な関係があり、形容詞は名詞として使われることがしばしばある。一方、ペルシア語では品詞分類がうまくいかない語も多数存在する。Karimi doustan(2008)¹¹によると、ペルシア語における *hefz* (protection, preservation), *anjām* (accomplishment, fulfilment), *pāyān* (finish, end) など、軽動詞と共起する *asāmiye gozārei* (述語名詞) と呼ばれる語の品詞分類に関して、ペルシア語学者の意見は一致しない。その理由は、これらの語は名詞としての特徴も動詞としての特徴も不完全であるからとしている。氏はペルシア語の辞書によるこれらの語に対する品詞分類の不一致に触れ、このような語を *mismatching words* (曖昧な語) と呼び、その動詞的な特徴と名詞的

な特徴を以下のように述べている。

3.1 曖昧な語の動詞的な特徴

1) 一般的な名詞は接尾辞 -hā によって複数形が派生されるが、これらの語は複数形をもたない。

- (12) *hefz-hā (intended meaning: protection)
- (13) *pāyān-hā (intended meaning: ends)
- (14) *anjām-hā (intended meaning: accomplishments)

2) これらの語は軽動詞と共起し、複合動詞を形成する。

- (15) hefz kardan (to protect, to preserve)

protect to do

- (16) pāyān dādan (to finish)

finish to give

- (17) anjām dādan (to accomplish, to fulfil)

accomplish to give

3) 動詞のように項を取ることができる。

- (18) anjām-e kār (doing work)

accomplishment-EZ work

表2. ペルシア語の辞書による曖昧な語に対する品詞分類 (Karimi doostan (2008:211))

Eventive mismatches			
words	Mo'aser dictionary	Mo'in dictionary	Sokhan dictionary
hefz 'memorizing'	Noun	Transitive Masdar	Masdar Noun
farāham 'providing'	Noun	Subject Noun	Masdar Noun
ʔanjām 'performing'	Noun	Noun	Masdar Noun
ʔedāme 'continuation'	Noun	Transitive Masdar	Masdar Noun
taqlil 'reduction'	Noun	Transitive Masdar	Masdar Noun
laqv 'cancelation'	Noun	Transitive Masdar	Masdar Noun
tahye 'provifing'	Noun	Transitive Masdar	Masdar Noun
reʔāyat 'observance'	Noun	Noun	Masdar Noun
ʔeʔtā 'giving'	Noun	Intransitive Masdar	Noun
parvareš 'fostering'	Noun	Masdar Noun	Noun

Stative mismatches			
Words	Mo'aser dictionary	Mo'in dictionary	Sokhan dictionary
farāmuš 'forgotten'	Adjective	Masdar Noun	Adjective
mahsub 'considered'	Adjective	Subject Noun	Adjective
moraxas 'release'	Adjective	Object Noun	Adjective
vādār 'persuading'	Adjective	Noun	Objective Adjective
gom 'losing'	Adjective	Adjective	Adjective
sābet 'proved'	Adjective	Object Noun	Adjective
maslub 'crucified'	Adjective	Object Noun	Adjective
xam 'bent'	Adjective	Adjective	Adjective
fāyeq 'overcome'	Adjective	Subject Noun	Adjective

3.2 名詞的な特徴

1) 動詞と違って人称語尾を取らない。

(19) *hefz-īdand. (intended meaning: They did protect.)

protect-suffix

2) エザーフェによって他の語の修飾を受けることが可能である。

(20) ehdās-e pol (construction of (a) bridge)

construction-EZ bridge

以上の例によって、名詞的な特徴も動詞的な特徴も不完全で、品詞の区別がうまくいかない曖昧な語の存在も確認できた。以下の部分では、ペルシア語における動詞のプロトタイプ的な特徴を述べ、典型的な動詞の区分から外れてしまう動詞の例をみていく。

4. ペルシア語における動詞

動詞は動作や実態を表す主な品詞の一つである¹²⁾。ペルシア語では動詞の語幹に過去語幹と現在語幹がある。時制を示す接頭辞及び人称の接尾辞が語幹につく。過去語幹が基本となって活用の際に用いられる人称語尾と、現在語幹が基本となる場合の人称語尾がある。また、他動詞の場合、主語を表す人称語尾に次ぐ目的語を表す代名詞接尾辞形も存在する。動詞に後接するこれらの人称語尾を表3にまとめる。

表3. ペルシア語の動詞による数と人称の活用語尾

	単数			複数		
	(present)	(past)	代名詞接尾辞形	(present)	(past)	代名詞接尾辞形
一人称	-am	-īm	-am	-am	-īm	-emā(u)n
二人称	-∅	-īd	-at	-ī	-īd	Etā(u)n
三人称	-ad	-and	-a(e)š	∅	-and	-ešā(u)n

動詞には単純動詞、接頭辞付き動詞、名詞派生動詞¹³⁾と複合動詞がある。Khanlari (1986:118)¹⁴⁾によると、ペルシア語の単純動詞の数が「300にも達しない。」

ペルシア語の単純動詞の数が乏しいことに Sadeqi (1993)¹⁵⁾、Dabir moqaddam (1995)¹⁶⁾、Karimi (1997)や Karimi doustan (2005)も触れている。単純動詞には *daštan* (to have), *raftan* (to go), *goftan* (to say), *āmadan* (to come) *dīdan* (to see), *neveštan* (to write)のように、一つの要素から構成されている動詞が含まれる。接頭辞付き動詞は一部の単純動詞に *bar-*, *dar-*, *bāz-* などのような接頭辞がついて *bar-dāštan* (to take, to remove), *dar-raftan* (to flee), *bāz-āmadan* (to come again), *bāz-neveštan* (to rewrite)のように新しい意味が生み出される。

名詞派生動詞は *jang* (war), *raqs* (dance), *gand* (unpleasant (smell)) のような名詞や形容詞に接尾辞の *-īdan* がついて *jang-īdan* (to fight), *raqs-īdan* (to dance) や *gand-īdan* (to decay) といった動詞が形成される。

複合動詞は名詞、形容詞、副詞のいずれかの要素と軽動詞 *šodan* (to become), *kardan* (to do), *zadan* (to hit), *dādan* (to give), *gaštan* (to turn, to become), *xordan* (to eat, to hit) などと結合し、単一の意味を持つ単位として構成される。これらの複合動詞の語彙的意味が結合する名詞、形容詞、副詞のような非動詞的な要素の意味に左右され、軽動詞が本来の意味を失ってしまう¹⁷⁾。

4.1 品詞分類が困難な動詞

4.1.1 動詞の不定形

不定形は動詞の過去語幹に接尾辞の *-tan(-dan)* がついて形成される。「動詞の基本形として、辞書の見出しとなるほか、文中で用いられた場合は動名詞に似た動きを¹⁸⁾」する。Karimi doustan, Zaker (2011)¹⁹⁾によると、ペルシア語の辞書や文法書においては、不定形の品詞分類は統一されていない。一部の辞書や文法書で主な品詞の一つとして扱われるが、一部で名詞の下位分類、もう一部では動詞の範疇に分類される。Karimi doustan, Zaker (2011) は不定形が場合によって名詞の範疇に、場合によっては動詞の範疇に分類される理由について、以下のことを挙げている。用例は Karimi doustan, Zaker (2011) によるものである²⁰⁾。

1) 不定形は名詞と同様に複数の語尾を取ることが可能である。

(21) az ?in āmadan-hā va raftan-hā xaste šode-am.

from this to come-PL & go-PL tired become-1SG

(I am tired because of so much come and go.)

2) 統語論的に動詞の役割を果たすことが可能である。

(22) bā sor?at raftan (to speed)

with speed to go

3) 動詞と同様に否定接頭辞 (na-) を取る。

(23) na-raftan-e Alī

NEG-to go-EZ Ali

(the case that Ali didn't go)

なお、Karimi doustan, Zaker(2011) は触れていないが、不定形は名詞が取る人称語尾を取ることにも可能である。

(24) ketāb-aš (his/her book)

book-3SG

(25) raftan-aš (his/her going (action))

to go-3SG

4.1.2 軽動詞の範疇逸脱

Karimi doustan, Zaker (2011:42) は次のように述べている。「現在のペルシア語では軽動詞の *kardan* と *šodan* は単独で文の動詞として一切現れなくなっている。これらの軽動詞は他の動詞と結合し、複合動詞を構成してはじめて述語になるのである。なぜならば、これらの動詞が本来の意味を失い、単独で統語的な役割を果たさなくなっているからである。」また、「伝統文法の定義からすれば、この二つの軽動詞は動作も実態も表さないことから動詞範疇に分類できない」²¹⁾。

さらに、Karimi doustan, Zaker (2011) は *kardan* (to do) と *šodan* (to become) が他の動詞と異なった振る舞いを見せている証拠として以下の理由を挙げている。

1) 過去語幹は名詞を派生する接尾辞の -e を取らず、*kardan* と *šodan* を用いての名詞派生が不可能である。

(26) nevešt-e (article)

(27) *kard-e (done)

2) これらの動詞の不定形がエザーフェ (-e) によって他の語の修飾を受けない。

(28) neveštan-e nāme (writing a letter)

to write-EZ letter

(29.a) *kardan-e komak (intended meaning: to do help)

to do-EZ help

(29.b) komak kardan be foqara (to help poor people)

help do to poor

(30.a) *šodan-e šab (intended meaning: falling of night)

to become-EZ night

(30.b) šab šodan (falling of night)

night become

しかし、Karimi doustan, Zaker (2011) は触れていないが、ペルシア語の軽動詞の中に上記の二つの特徴を有する動詞に他に nemudan (to do), gaštan (to become), gardidan (to become) も含まれる。kardan と šodan と同様にこれらの軽動詞も過去語幹は名詞を派生する接尾辞の -e を取らない。

(31) *nemud-e (intended meaning: done)

(32) *gašt-e (intended meaning: done)

(33) *gardid-e (intended meaning: done)

また、これらの動詞の不定形がエザーフェ (-e) によって他の語の修飾を受けることもない。

(34.a) *nemudan-e ašenā (intended meaning: to inform (a person) of)

do-EZ acquaintance

(34.b) ašenā nemudan (to inform (a person) of)

acquaintance do

(35.a) *gaštan-e tufāni (intended meaning: to become typhoon)

to become typhoon

(35.b) tufāni gaštan (to become typhoon)

typhoon to become

(36.a) *gardidan-e monʔaqed (intended meaning: to be binded)

to become-EZ bind

(36.b) monʔaqed gardidan (to be binded)

bind to become

4.1.3 規則にはまらない一部の感情動詞

ペルシア語の一般的な複合動詞は非動詞的な要素と軽動詞からなっていて、時制や人称は軽動詞の屈折語尾において標示される。

(37) xeyli afsus xord-am. (I regretted it a lot.)

alot regret-PAST-1SG

(38) zamīn xord-am. (I fell over.)

ground hit-1st.

しかし、この規則に反し、人称活用の面で他の複合自動詞と異なった動きをみせる複合自動詞が存在する。つまり、人称語尾が動詞ではなく非動詞的な要素につくのである。

(39) del-am gereft. (I feel sad.)

heart-1SG take

(40) sard-am šod. (I feel cold.)

cold-1SG become-PAST

これらの動詞は感情を表す動詞であり、Khalantari(1986:176)によると現代ペルシア語で数が多い。氏はこれらの動詞を認識していながらもその特性について説明していない。以下その主な感情動詞を挙げる。-...の部分は人称語尾がつく部分を示している。

(41) xoš-... āmadan (to like)

(42) bad-... āmadan (to dislike)

(43) sard-...šodan/budan (to feel cold)

(44) garm-... šodan/budan (to feel hot)

(45) del-... gereftan (to feel lonely)

(46) xāb-... bordan (to fall asleep)

(47) laj-... gereftan (to get angry)

(48) ašk-... darāmadan (to cry)

(49) saxt-... budan (to feel something is difficult)

(50) be sar-... zadan (to think about something)

(51) tu zōq-... xordan (to be disappointed)

(52) hers-... gereftan (to get annoyed)

(53) xande-... gereftan (to laugh)

これらの感情動詞は他の動詞と異なったふるまいを見せている証拠として下記の点を挙げることができる。なお、2) と 3) は動詞範疇に分類しにくい理由として Karimi doustan, Zaker(2011) が kardan と šodan について挙げている証拠と同一である。

1) 人称を代表する接尾辞が動詞的要素ではなく、非動詞的要素に接尾する。

動詞的要素の人称語尾は常に三人称単数で現れる。軽動詞は時制で活用し、否定接頭辞の -na を取ることが可能である。

(54.a) dīšab sard-am bud. (I felt cold last night.)

last night cold-1sg was

(54.b) *dīšab sard bud-am.

last night cold was-1sg

(55) dīšab sard-et bud? (Did you feel cold last night?)

last night cold-2SG was

(55) dīšab sard-ešān bud. (They felt cold last night.)

last night cold-3PL was

(56) emšab sard-am nī-st. (I don't feel cold tonight.)

tonight cold-1SG NEG-is

2) これらの動詞の不定形は一般的な動詞と違って他の語の修飾を受けない

(57.a) *sard-am budan-e man (intended meaning: my feeling of cold)

cold-1SG to be-EZ I

(57.b) *sard budan-e man (intended meaning: the matter that I am cold)

cold to be-EZ I

(57.c) ehsās-e sarmā az taraf-e man (my feeling of cold)

feeling-EZ cold from -EZ I

(58.a) *xande-am gereftan-e man (intended meaning: my feeling of cold)

(58.b) *xande gereftan-e man (intended meaning: my laughing)

(58.c) xandīdan-e man (my laughing)

3) 名詞を派生する接尾辞の -e を取らず、単独で名詞の派生が実現されない。

(59.a) *sard-aš šode (intended meaning: cold)

(59.b) *sard-šode (intended meaning: cold)

(60) kond-šode (low-speed)

(61) dorost šode (made, adjusted)

4) 一般動詞の不定形が取れる人称語尾を取れない。

(61) *sard-am šodan-am (intended meaning: my feeling of cold)

以上の理由から、これらの感情動詞が一般動詞の範疇から外れていることが伺える。

5. まとめ

本稿ではまずペルシア語における伝統文法による品詞分類の概要を述べた。それから、名詞と形容詞および副詞の緊密性に触れ、ひとつの語が二つ以上もの統語的な役割を果たす品詞の柔軟性について説明した。ペルシア語では語の形態的な特徴が乏しいことから形容詞でありながら名詞、場合によって副詞としての役割を果たす語の品詞分類の曖昧性が顕著である。また先行研究でも指摘された名詞としての分類も動詞としての分類もうまくいかない曖昧な語や不定形の名詞的な特徴をとりあげ、部分的に説明を補足した。さらに、先行研究では品詞分類の問題が取り上げられていない一部の感情動詞をとりあげ、一般動詞と異なった振る舞いや統語的な特性について議論した。先行研究では軽動詞の *kardan* と *šodan* が短文の動詞として現れなくなっていると指摘されているが、本校では *kardan* と *šodan* に加えて *nemudan*、*gaštan*、*gardidan* も同様に一般動詞のカテゴリーから逸脱してことを論じた。

注

- 1) 本論文の執筆にあたり、ネイティブチェック等のコメントをいただいた榎村輝氏に感謝申し上げます。
- 2) セイリッシュ語族の言語においては品詞区別の有無が多く言語学者の議論を巻き起こしてきた。渡辺 (2008) は四つの基準を組み立てて、セイリッシュ語族の一言語であるスライアモン語における「名詞」と「動詞」の区別が可能であることを結論付けている。

(1343) طالقانی (3)

(1372) شریعت (4)

(1380) کلیاسی (5)

6) Amin madani(2015:38,70 (امینمدنی 1394)

7) エザーフェは、いわゆる繫辞 (Linker) のことを表す。

(1385) ستوده، غلامرضا، مهرکی، ایرج، سلطانی، اکرم (1385)

(1383) انوری، حسن (1383)

10) 強勢の -i

(1387) کریمی دوستان (1387)

12) Khanlari(1986:18), Taleqani(1963:29)

13) fahm-īdan(to understand), jang-īdan(to fight),pok-īdan(to blow) などのような動詞で、名詞的な要素に動詞を派生する接辞 -īdan がついて形成される動詞。これらの動詞はペルシア語で fe`lhayē ja`li, fe`lhayē sena`i や fe`lhayē esmi と呼ばれる。

(۱۳۶۵) خانلری (14)

(۱۳۲۲) صادقی (15)

(۱۳۷۴) دبیرمقدم (16)

17) ペルシア語で何を複合動詞に含め、何を含まないのか議論がつきない。複合動詞について、非動詞的要素と動詞的要素の結合の強弱や二つの要素の結合による新たな意味の成立の有無が多く議論を巻き起こしている。Meshkatoddini ((1987) مشکوه الدینی ۱۳۶۶), Sadeqi((1993) صادقی ۱۳۷۲), Karimi(1997), Karimi doostan(2005), 榎村 (2017) を参照。

18) 吉枝 (2011:53)

(19) کریمی دوستان، غ. و. آ. ذاکر. ۱۳۹۰

20) グロスおよび英訳は筆者によるものである。

21) しかし、かなりの限られたケースであるが kardan と šodan は口語で用いられる場合がある。

(1) mā kard-im šod. (we did it and it worked.)

We did-1SG became

また、kardan は単独で性行為を表すこともある。

参考文献

Goksel, A. and Kerslake, C.

2005 *Turkish: A comprehensive grammar*. London and New York: Routledge.

Karimi- doostan, Gh.

2005 “light verbs and structural Case”, *lingua* 115:1737-1756.

Karimi- doostan, Gh

2011 “Lexical categories in Persian”, *Lingua* 121: 207-220.

Karimi, S.

1997 “Persian Complex Verbs: Idiomatic and Compositional”, *Lexicology*, 3/1:273-318.

榎村輝

「ペルシア語の関係節からみた『語』における意味と形式のミスマッチの問題について」,
『第154回日本言語学会大会予稿集』176-181, 日本言語学会.

木村新次郎

1996 「意味と品詞分類」『国文学解釈と鑑賞』第61巻1号(至文堂)20-30.

松村明他編

1995 『大辞林 第二版』三省堂.

ルビンチク, ユー. アー

2000 『ペルシア語文法』(佐藤昭子訳)東京:私家版

山橋幸子

2013 『品詞論再考: 名詞と動詞の区別への疑問』羊書房.

湯浅悦代

2009 「品詞分類からみる意味と形の自律性についての考察」『16th Princeton Japanese Pedagogy Forum』63-74.

吉枝聡子

2011 『バルシア語文法ハンドブック』白水社.

渡辺己

2008 「スライアモン・セイリッシュ語の品詞について -- 特にその名詞と動詞について」『アジア・アフリカの言語と言語学』3, 117-134.

امین مدنی، صادق

۱۳۹۴ دستور توصیفی فارسی معاصر، توتیا.

انوری، حسن

۱۳۸۳ فرهنگ روز سخن، انتشارات سخن.

خانلری، پرویز

۱۳۶۵ تاریخ زبان فارسی، تهران، انتشارات نشر نو.

دبیرمقدم، محمد

۱۳۷۴ «فعل مرکب در زبان فارسی»، مجله زیاتشناسی، سال ۱۲، شماره ۱ و ۲، ص ۴۵-۲.

ستوده، غلامرضا، مهرکی، ایرج، سلطانی، اکرم

۱۳۸۵ لغتنامه دمخدا، انتشارات دانشگاه تهران.

شریعت، محمدجواد

۱۳۷۲ دستور زبان فارسی، تهران، انتشارات اساتیر.

صادقی، علی اشرف

۱۳۷۲ «درباره فعل‌های جعلی در زبان فارسی»، مجموعه مقالات سمینار زبان فارسی و زبان علم، تهران، مرکز نشر

دانشگاهی، ص ۲۴۶-۲۳۶.

طالقانی، سید کمال

۱۳۴۳ مختصر دستور زبان فارسی، بنگاه مطبوعاتی و کتابفروشی مشعل، اصفهان.

کریمی دوستان، غ. و آ. ذاکر

۱۳۹۰ «رویکرد حوزه ای به اجزای کلام در زبان فارسی». زبان و زبان شناسی، (۱۰): ۲۷-۴۶.

کلباسی، ایران

۱۳۸۰ ساخت اشتقاقی واژه در فارسی امروز. تهران: پژوهشگاه علوم انسانی.

مشکوه الدینی، مهدی

۱۳۶۶ دستور زبان فارسی بر پایه نظریه گشتاری، انتشارات دانشگاه فردوسی